

## 「私らしく」

3年

本当の自分って何だろう。全てに完璧を求めて苦しくなる自分。周りに合わせて、本音を言わない自分。そんな自分が嫌になる。

6人で襷をつなぎ、駆け抜ける駅伝。

1区の設定楽は、内気で自分に自信がない。2区の太田は、不良を気取り、素直になれない。3区のジローは、人から何か頼まれると断れない。4区の渡部は、自分をつくろい、プライドが高い。5区の俊介は、他人に自分の悩みを打ち明けられない。6区の榊井はチームの部長で、一人でたくさんのことを抱え込む。努力しているのに結果が出ない。そんな自分から目を反らしていた。

環境も性格も全く異なる六人が集まり、駅伝を通して相手を知り、自分を見つめ、成長していく。

彼らは、それぞれが自分と戦っている。私もその中の一人である。渡部と同じようにプライドが高い。中学校で吹奏楽部に入部してしばらくたった時。他の一年生が上達する中で、自分は思うように音が出なかった。悔しい、という感情が、いつの間にか心に壁を作ってしまった。

同時に私は榊井とも似ている。負けず嫌いの私は、絶対に努力を怠りたくないと思っている。榊井と同じように吹奏楽部の部長になってからは、一層その思いはが強くなった。自分が引っ張っていかねばと、これまで以上に練習を頑張った。でも、合奏に参加するとうまく音が出せなかった。部長としての役割を果たしているのか不安になった。そんな自分が嫌だった。努力しても報われないこともあるのか……。思い描いていた自分と、現実の自分との隔たりが、少しずつ大きくなり、努力することに抵抗を感じるようになっていった。

私は気付いた。渡部と榊井は、私とは違う。二人は自分を見失っていないし、自分から逃げてもいない。祖母と二人で暮らす渡部は、自分の意思で、自分のイメージを作っている。榊井は、自分の努力が結果につながらなくとも、努力することをやめなかった。二人は、自分としっかり向き合いながら、自分自身と戦っている。でも、私は向き合うどころか逃げていた。自分の本当の姿を見ようとせず、心の声を聞かず、自分らしさをどこかに置いてきてしまったようだ。

「誰だって、本当の部分なんて見せられるわけがない。生きていくってそういうことだし、集団の中でありのままでいられるやつなんていない。」

渡部が駅伝を通して気付いたことだ。私だけじゃないんだ。そう思うと、心がふっと軽くなった。誰だって、自分の全てを出せるわけではない。本音を隠すことだってある。人とかかわるって、そういうことなのかもしれない。

中学生になったばかりの私は、自分のことは自分でやる、人には頼らない、そう思っていた。でも、中学校での経験や人とのかかわりを通して、思いを伝えることの大切さを知った。自分にとって大きな悩みも話してみるとそうでもないと感じることもあった。

6人は駅伝を通して、ありのままの自分を受け入れることで、自分を知り、自信が持てるようになった。また、互いに認め合い、支え合うことで、すばらしいチームとなった。一人ではできなかったことだ。人との出会いが彼らを変えたのだ。孤独を抱え、自分と戦っていた彼らに「居場所」ができたのだ。自分を理解してくれる人がいる安心感。自分らしくいられる心地よさ。

私には、そんな居場所があるだろうか。周りをよく見てみると、意外にもたくさん見つけることができた。家族、ピアノ教室の友達、習字教室の友達。学校には、何気ない会話で笑い合う友達も、辛いとき励まし合う友達もいる。悩みながらも目標に向かって努力する部活動。それぞれが私にとっての大切な居場所だ。自分の居場所は一つではない。

これまでの自分は、「集団の中の自分」のイメージを勝手に作り上げ、苦しんでいたのかもしれない。いつでも完璧でいたい。だから、結果が出ない自分を認めたくない、そう思っていた。でも、できない自分、弱い自分を認め、受け入れることが大切だということに気付いた。まずは、自分を知り、認め、好きになることから始めようと思う。

目を閉じて考える。今なら自分の長所も短所もたくさん言える。まるごと全部が「私らしさ」なのだ。

本当の自分——。それはずっと分からないままなのかもしれない。だから私は、ゆっくりと自分を見つめていくことにした。私の周りには、友達がいて、家族がいる。そして、たくさんの出会いが待っている。それぞれの居場所で、いつも私らしくありたい。

榊井から襷を受け取った私は、今、7区を走り出す。今度は自分を見失わないように……。私は私らしく、前を見つめる。

「あと少し、もう少し」瀬尾まいこ著